

武蔵野日曜聖書講筵 祈祷会

己をすて我に従え

——マタイ伝第16章21～26節——

1975年6月29日

小池辰雄

キリスト神秘 神に即するか、人に合わせるか 文化文明の土台 キリストの中にすてる 復活の霊生が来るから十字架が負える 天国入門の札 天国即永遠の生命を得る みんな天来の響き 聞かれざる祈り

【マタイ16】

21この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・学者らより多くの苦難くるしみを受け、かつ殺され、三日めに甦かたええるべき事を示し始めたもう。22ペテロ、イエスを傍かたえにひき戒め出でて言う『主よ、然しかあらざれ、此の事なんじに起こらざるべし』23イエス振反ふりかえりてペテロに言かえい給う『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物つまずきなり、汝は神の事を思わず、反かえつて人のことを思う』24ここにイエス弟子たちに言かえいたもう『人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。25己が生命を救わんと思う者は、これを失い、我がために、己が生命をうしなう者は、之を得べし。26人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代しろに何を与えんや。』

●キリスト神秘

21この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・学者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦かたええるべき事を示し始めたもう。

キリストは、自分がどのような死に方をし、またどのように復活なさるかを、もう予知しておられる。それでこういったことを三回言われた。それほど弟子たちに懇ろに言われたも、彼らは、キリストが十字架にかかってしまったあとは、全く失望落胆で、復活したことを聞いても、

「そんなことがあるか」

くらいに疑ったりいぶかしがったりした。そういうようなことがそのまま書いてあります。それくらい、イエスという方は地上に居て、もう天界を歩いているような方でありませ



もう先が先まで見えていらつしやる。

長老・祭司長・学者たち、こういつた連中とは世界がまるで違うものだから、どうしても食い違う。そこで、彼らから苦しみを受ける。即ち、十字架で殺される。しかし、

「自分は彼らに殺されるのではなくて、自分を贖罪のために神さまに献げるのだ」

と言われた。その最後の祈りをこれからあとでゲッセマネでなさるわけです。ある意味において、ゲッセマネの祈りというのは歴史の一番どん底です。

「三日めに甦えるべき」という。この「べき」はギリシア語で「ダイ」という字で、

「必ず甦る、甦らざるを得ない」

という気持の「べき」です。非常に強い。それほどに、キリストは

「必ず三日めには墓を蹴破つて出てくるぞ」

という盛んなる霊的な生命です。これは

「キリストに隠れているところの霊生が顕れる」

といつてもいいわけです。根源の霊的な力が証明される。

私たちも、このキリストの生命は思われている世界ではなくて、本当に内側に受けとつていなくては。そのためには絶対祈りが必要です。深い祈りの世界で合一の世界に入る。これはパウロもヨハネもみんなそうですが、

「キリスト神秘」

ということですよ。私たちがこのキリスト神秘の中に入っていないかったら、我々の信仰は本ものでない。どうぞ、新しい方もいらつしやいますが、決して急ぐことはないけれども、必ずこの集会に連なつていらつしやれば、素晴らしいところに来ますから。

● 神に即するか、人に合わせるか

22. ペテロ、イエスを傍かたえにひき戒め出いでて言う『主よ、然しかあらざれば、此の事な

んじに起こらざるべし』

これはとんでもない言葉です。ペテロは人間的に、「キリストが殺される」なんていうことはとても耐えられないと思った。人間的な気持としては分かりますけれども、それはキリストのこの大事な本道、一番本質的な霊的生命的な事態が分かってない。人間的な考えである。

23. イエス振り反りてペテロに言い給う『サタンよ、我が後ろに退け、

と。もし、ペテロのような気持だったら、これはキリストがサタンに負けますから。そういったサタンの角度の言葉に――ペテロ自身は何もサタンと自分では思つてませんけれども――サタンの角度であるから、そこで、「退け」と言われた。

「私は神の命に従つて十字架につき、そして甦る。贖罪をし、また永遠の生命を与える大事な道を踏むのだ」

ということですから。これは本当にイエスというひとはそこを身につけていらつしやる方



ですから、確信をもって言われたわけですよ。

「汝はわが蹟物なり、汝は神のことを思わず、反つて人のことを思う」

と。私たちの毎日の生活で、神に即するか、人の判断にただ合わせているか、ということは何でもないようだけれども、非常に大事なことです。

表面では、パウロが言ったように、「弱き者には弱く」という面は大事です。大事だけれども、「弱き者には弱き」

でもって、それでその場をごまかすような弱さに調子を合わせたらダメなので、「弱き者には弱き」となったら、必ずその弱きを神の世界に入れる。この世の在り方に、あるときはそれに調子を合わせる。けれども、相手を別な世界に入れるためのひとつの手段というか、道というか、そういう意味で、パウロは、

「いかにもして人を救わんがために」

と言っている。いかにもして救わんがために自分は折れるんだ、和光同塵になるんだと。その和光同塵になるのは、相手と調子をただ合わせるわけではなくて、これを本当に次の世界に、素晴らしい世界に入れるためだと。こういうことでもありますので、人のことを思つてお終いのような行き方だったらダメです。

「地につける憂いはダメだが、しかし、神につける憂いは必ず喜びになる」

とパウロが言っているとおります。私たちはどこまでも神中心、キリスト中心の行き方です。それは何も、何と言いますかね、

「私はクリスチャンだから」

と、すぐパツと言ひ張つたりするようなことではない。もつと溶けた世界です。もつと溶けた世界で、実は相手を救いあげてしまう。この境地はだんだん分かってきますけれども。

「神のことを思う」

というのは、神のことに即する、そして人のことには反対であるということですよ。

●文化文明の土台

まあ、日本は本当にこのまま行ったらどうなることか。これは昨日、T君にも言ったんだけれども、

「幕屋の人たちは大事な使命を負っている。ただ自分たちと同信の者たちと喜び踊っているばかりではダメだ」

と、私ははつきり言いましたよ。それは、ある時はみんなと踊つたつていいよ。けれども、じっくりと深くこの魂の世界を——今はいわゆる教育界にはもう期待できないから——魂の教育を家庭の人たちがしなくてはいいかん。お父さんやお母さんの家の教育が大事なんだ。学校の教育は期待ができない。

大体、左がかったやつが銀行や会社に就職できない。そうすると今度は、公立学校の方



に行く。公立学校の方には門戸が開いているものだから、その先生になる。そうすると、小さい魂がみんなそつちに化せられていく。恐ろしいことです、これをやっている。あの「日教組」というのは癌ですから。私はよく自動車の運転手やなんかとも話すんですよ。運転手なんかもそういうことに憤慨しているんだ。

「うちの子どもは学校で妙なことを教わっている」
なんて言う。

これからはもう、一対一の教育を地道にやっていかななくては。いわゆる教育者が教育するのでなくて、福音を受けている人たちが次の日本の国民をつくっていく。それだけの使命があるんだということが大事なんです。だから、ただ病が癒えるとか何とかと、そんなことではない。もうひとつ奥の世界のことです。手島さんの集会にはカリスマ的な力が働くから、極限状況の人が病を癒されるのは結構ですよ。結構ですけれども、日本の健全な展開のために、この魂の世界の教育がまた大事な使命であるから、そのことを自覚してもらいたいと思って、私は今度は言うつもりですから。

神の福音が、何と言つても、文化文明の土台である。文化文明の土台であるところの福音、宗教でなければ、もう宗教はやめた方がいい。福音がそういう意味におけるところの最も健全な原動力である。

「まあ、宗教のことはちよつと余計だから、文化でいきましょう」

なんて言うが、私は「文化講演」なんて嫌いなんだ、本当は。私のは文化講演ではない。文化の底の講演をしている。頭で聞いて、なにか頭で満足するような文化講演会なんてのは御免こうむる。

皆さんも、この福音にここで接したかぎりには、一人びとりのつぴきならない使命を担わされている。そして、神さまが必ず助けてくださる。神さまはいよいよ力を与えてくださいます、絶対に。私は、ここに来ることを躊躇したり、いろんなことでゴタゴタしている人を本当にお気の毒に思う。あなた方はそういう人たちのお友だちだから、何とかしてだんだんそういう人たちも、

「やつぱり戻ってきてよかった」

ということにしていたきたいと思います。

●キリストの中にすてる

24 ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に従い来らんとせば、己をすて、己が十字架を負いて、我に従え。』

聖書の中の最も激しい言葉の一つです。

「私について来ようと思うならば――私は十字架の道、十字架道だ。これから十字架に向かって行く。だから、同じく十字架に向かって――自分をすてて、己が十



十字架を負いて、私に従え」
と。おもしろいね、

「己をすて、己が十字架を負いて」
という。十字架を負おうと思つたら、まず己を棄てなければ負えないということです。

「己をすてる」
というのは、己を片づけてしまう、己を何ものとも思わない。では、

「その「己をすてる」は一体どこに棄てたらよからうか」
と言つたら、そこらに棄てるのではない。キリストの中に棄てることです。

「己をわがうちにすてよ。お前は私の中に自分をすててごらん」

と。キリストの中にすてるのだから、こんな有り難いことはない。キリストは決してそれをすてない。キリストはこれを受けとつてしまう。キリストの中に、あるがままにして、自分をすてる。十字架上の片一方の盗賊も、あの気持はキリストの中にすてたような気持だ。

「汝、今日、我と共にパラダイスだ」

と言われる。キリストの中にすてると、私たちはこんな有り難いことはないわけです。もう遠慮なしに己をすてる。

「でも、私はこういうわけですから」

なんて、ひとつも言う必要はない。無条件です。分裂なら分裂のまま、頑かたくなら頑なのまま、傲慢なら傲慢のまま、塞ふさいでいるなら塞いでいるままですてればいい。

いろいろ問題もあるでしょうけれども、日曜日とはかく、問題をしょつたまんまでこの中に来てください、キリストの中に。そしたら、キリストは内側から全部そいつを解決してください。相対的な解決はこないかもしれない。けれども、絶対の世界では解決が済んでしまう。そういう、何の問題であろうと、結婚問題であろうと、恋愛問題であろうと、就職問題であろうと、勉強問題であろうと、何であろうと、みんなこれをキリストの中に持ってきてしまう。とにかく、ある絶対の境地に入らなければ、もう力が来ないことははっきりしているんです。

絶対の境地とは、何か自分が絶対的なとり澄ました気持になるという意味ではない。それこそ、絶体絶命でいいんです。絶体絶命、行き詰まりのまんま、キリストの中に棄てればいい。それは全身で。絶体絶命で、

「もうすみません、まいりました」

と言つたら、俄然来てしまう。そこなんです。この世に絶すると、そこに天界が開けてくる。だから、八方破れ、八方塞がりでもいい。破れでも塞がりでもいい。上から来るから、全部これは開いているでしょ、上は。もうこれだけです。仏教でもキリスト教でも問題はそれだけです。相対的現実が解決されなくなつていいよ。ひとにどんなに誤解されたっていいよ。どんなにけなされたっていい。



「そんなことは違うんだ」

というものがあなたの方の中に烈々として燃えていけば、必ず勝ちます。この福音というのは人間の思想とか哲学とか、そういうのと違うんだ。その中に入ったらば、何と言いましようか、もう力が溢れてしまうがない。

なぜ、私が元気かというのと、水泳をやっているからではない。霊界を水泳していますから。ありがたいね。私なんていうのは、おおよそダメな男なんだ。けれども、こういうようになつていくから仕方がない。相対的な世界でああだこうだとやっているうちは、信仰でも終いにはくたびれてしまう。私たちの、

「年がたてばたつほどいよいよ盛んなるかな」
と。これは本当ですよ。

●復活の霊生が来るから十字架が負える

「己をキリストの中に、私の中にすてなさい」

と書いてくださればよかつただけれども。言わないんだ、キリストは。意地がわるいから(笑)。

「聞く耳ある者は聞くべし」

なんてね。

「己をすてるとは、どこに棄てましょうか」

といえば、

「キリストの中にすてましょう」

ということになる。そうしたらば、自分は十字架を負おうとしなくてたつて、ちゃんと十字架が負われるようなことになる。キリストの中に棄てれば、キリストはもの凄い力を持っている。そのキリストの不屈の力、この復活の霊生が来るから、十字架が負える。

イエス・キリストが負った十字架は75キロあったそうだ。キリストも重すぎて時々ぶつ倒れた。それはそうですよ、それまでにさんざんぶつ叩かれ、ろくすっぽ食べさせられないで、イエス・キリストも肉体的には確かに弱っていたに相違ない。だから時々倒れながら進んで行かれた。クレネ人のシモンが一端を負ったという。けれども、キリストが肉体的にいかにもその時に弱くみえても、キリストの霊生は逆に強かっただろう。でなければ、あれだけの迫害と恥辱とを受けながら、黙々と行くわけにいかない。本当に十字架のことを相対的現実で少し瞑想すると、たまらんです、正直。どれほどの苦しみであったか。けれども、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし。」

しかし、彼らを救せ。わが魂を御手に委ぬ」

と。非常に深い人間性と、人間性の中の深い神的な愛と、渾然とした姿です。しかも、単なる人間性ではない。「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」というのは、もの凄い烈々



たるところの義の叫びである。義の叫びと愛の叫びがああ十字架の中にあるわけです。

「己が十字架を負いて、我に従え。」

我が荷は軽し。十字架を負わせてやる。私が負っているぞ」

と。殉教者のお話を聞きますと——あの長崎の二十六聖人もそうです——昔の紀元2世紀あたりの迫害の時に女の方でも十字架の上で火に焼かれながら、讚美歌を歌って往かれたという。彼ら殉教者はやはり天国の一番高いところに居るに相違ない。私たちもこれから同様の暗雲低迷、キリスト教迫害の時が来るかもしれない。その時に我々はキリストの生命に——毎日毎日キリストに自分を棄ててかかって、平時が大事です、平時において本当に自分に死んで——キリストに生きていような生き方をしていないと、いざという時にはうろたえることになるでしょうね。

相対的な話でも、いつ地震が来るかわからない。私たちの生命というものは、いつ交通事故に遭って死ぬかもしれない。正直、保障されていないですよ。だから、いついかなるときにあつても、その瞬間に

「アーメン、ハレルヤー！」

と言える魂になっていたいです。

●天国入門の札

「私に従い来て、わが道を往つて神の国に、天界に行く。」

天国に行きたいと思う者は、私に従え」

と。地上はもうせいぜい百年です。せいぜい百年で向こう側にみんな行くわけだ。これから80年たつと、みんな向こう側です。もう今、地上においてその生命の中に居なかつたらつまらんですよね、正直。序曲にして本曲を既に歩いていなければ。

己を棄て、キリストの中に自分を投げかけ、投身しながら行く。十字架というのは、いただいたところの天国の札なんだ。天国入門の札なんだ。天国に入る時にどういふ印を持っていくかという、胸に掛けている金の十字架を持つて行つたつて、これはダメだ。

毎日が、私は新しいんです。そしてもう、けろり忘れてしまう。忘れるといつたつて、頭で忘れていても、身体の中には入っている。真理を語ると、真理は皆さんの中に流れこむ。と同時に私の中にも、ある沈殿をしている。沈殿と言つたらおかしけれども、決して空っぽではない。もちろん、頭では忘れていきます。けれども、私は形成されつつある。皆さんも、それで形成される。そして、与えられたものは必ず活用しなければダメですよ。真理は活用しなければ生きない。福音の真理は、受けたままで

「ああよかつた」

ではダメです、活用しなければ。活用すると、その真理が身につくんです。

人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、



と。キリストのあとをついて行こうと思つたらば、自分をキリストの中に棄てます。あるがままに棄てます。私は本当にそうだ。そういうように棄てる。そうすると、

己が十字架を負いて、我に従え。

と。その十字架は胸に掛けていているような——女の方は胸に十字架を掛けたつていいよ、ひとつの印として——ものではなくて、パウロが

「我はキリストの十字架の印を帯びるものなり、我を煩わせるな」

と言つたが、パウロが言つたこの十字架は彼の存在の中に食い込んでいる十字架です。

私は言う。日本人は日本の国旗を自分のうちに持て、自分自身が国旗となれと。

「心に太陽を持て」

と言うが、この心臓が太陽のごとく——ゲーテさんに負けてはダメだ——本当に太陽が内側から輝けば、影あれども影なしという人になる。自分が灯火だ。灯火が自分の中にあるから、自分の影がどこにもでない。外の光に照らされていると影がでるけれども、内側の霊的な私を見た人は、私には影がないということを知る。皆さん一人びとりがそういうことです。相対的、人間小池には影がある。けれども、絶対的、人間小池には影がない。だから、影があれどもなきという世界に入る。そういうわけです。

「己が十字架を負いて、我に従え」

即ち、十字架の印を本当に自分に負つて行けと。

「キリストと共に十字架せられたり」と。十字架せられて歩くことが「十字架を負う」ことなんだ。十字架されて歩いていけると、いわゆる十字架を負うというような苦難も苦難でなくなってくるわけだ。だから、パウロもペテロも言いました。

「苦難はくればくるほど喜べ。これはキリストの御霊があなた方の中でいよいよ

よ力とならんがためである」

と。そういうことはペテロさんもヨハネさんもみんな同じことです。

「己が十字架を負いて、我に従え」

という言葉が今度は、本当に私たちの力になる。こんな恐ろしい言葉が、私たちにこれではなければならないという力になってくるんです。どんな現実でも来てみるということになる。この一句を本当に一晩でも瞑想してその中に入つたら凄いことになる。

大事ですよ、この瞑想、祈りというのが。それで本当に化体かたいすることが。身体に化することです。たくさん読む必要はない。ときにはぐーつと通読しなければダメだよ。私がこのあいだ旧約聖書をバーツと話したように。

●天国即永遠の生命を得る

²⁵己が生命を救わんと思ふ者は、

「己が生命を救わんと思ふ者」は、相対的な生命にこだわっている自我中心のやつは、そ



これはダメです。ところが、生まれつきの人間はみんなこういうわけです。

これを失い、我がために、己が生命をうしなう者は、之を得べし。

我がため——福音のため、神のため、あるいは「人のため」と言ってもいい——己が生命をうしなう者は——捨て身の者は、捨て身、棄て石の者は——反つて之を得る、本当の生命を得る。棄てたと思つたらば、実はどっこい、もつと凄いものが入ってくる。

「相対的なものを棄てろ、絶対的なものが入ってくるぞ」

ということですよ。相対的な生命なんか要らんじゃないか、絶対的な生命がいいじゃないですか。我々の相対的な生命はもう決まっていますんだもの。「健康だ、病気だ」なんて言つたつて、たかがしれている。本当の健やかなる生命は、床の上に寝つきりの癌の患者でも、

「私は生きてます」

と言えるんです。ところが、マラソンのチャンピオンでも、本当に魂がキリストの永遠の生命を受けてなければ、それで死んでしまう。私たちは、

「永遠の生命はいかにして得るか」

ということを求めている、誰だつて人間の根源衝動は永遠の生命に向かつている。地震がきて倒れそうになった時に、

「ああそうですか」

なんて平気でいるやつはまずいじゃないわけだよ(笑)。どうやって助かるうかとみな思う。それならば、相対的な生死を超越をしたところの絶対的な生の世界に入ろうではないですか。

「キリストが、神さまが聖書をとおして与えようとしているのは、天国即永遠の生命の世界である。永遠の生命即天国の世界である。最後の神の国はそういうところである」

と。だから、今、相対的なこの中にいながら、永遠の生命を、天国をもう既に得ようではないか。

「天国は近づけり。悔い改めよ」

と。キリストが近づいてきて、

「私は天国体である。私にしがみつけ」

と。これは十字架を通るまではしがみついてもダメでしたけれども。そういうことです。

26人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代しろに何を与えんや。

どうしたんだい、どうにもならんじやないかと。キリストが、

「全世界ともこの一人の生命とは代えられない。それくらいに、一人びとりは大事ではないか」

と言っています。

「お前に全世界をやるよ。ただし、お前の生命をくれ」



と言われたら、どうにもならん。全世界をもらっても自分の生命がなくなったらどうにもならん。しかし、

「永遠の生命があれば、全世界は要らん」

と。それはもう全世界を持つているようなものです。

だから、神・キリストに合一する世界、同形同質の世界に入ってしまう。ホモウジオス（同質）です。キリストと神さまと同人となる。同人となる質に入る。

●みんな天来の響き

こういうことを言うと、今までの無教会の人たちは、

「とんでもないことを言う」

と思う。ただキリストの十字架で贖われたと、こればかりです。こないだ、Dさんという方が85歳で亡くなった。その告別式に私は行きました。その親友のTさんがDさんのお通夜に行つて帰ってきたら、自分がたおれてしまった。あとを追うようにして二人とも逝つてしまった。これは塚本先生の直弟子の非常に大事な二人です。本当によくやっていたしやいました。お二人ともそれぞれ立派な生涯でした。けれども、残念ながら、信仰はやはり無教会信仰です。そのお友だちが告別式で言うのを聞いていても、やはり、キリストの十字架の贖い、罪の赦し、それだけを一生懸命で、

「これが無教会の、教会とは違うところだ」

なんて、一般の人に言っている。硬くて堅くて。それで何も喜びがこない。まあ、お葬式だから、喜びがきたらわるいかもしれないが（笑）。それを突破したところの、「万歳！」というような世界ではないんだ。そして、私は行くと、昔の友だちに、無教会のいろんな人に会う。私の同年配の人たちはもうヨボヨボしている。だから、私を見るとびっくりして言うんだよな、

「お元氣ですね」

なんて。仕方がないから、

「ええ、元氣です」

と答えるが、本当にもう勝負ありなんです。信仰の質が違うから。無教会の信仰の質はいいですよ。質はいいんだけど、残念ながら観念であり、あるところで限界がきている。

そんなことをこのキリストの弟子たちが言っているかと言うんだ。この烈々たる世界を証言している。皆さんは、この集會に飛び込んできたのは摂理です。ヨゼフと同じです。だから、どんなことがあっても、私がとにかく受けとっているものに対しては絶対に信頼してもらいたい。というのは、

「私の真似をしろ、私と同じ考えになれ」

とか、そんなことを言っているのではない。この質はキリストから来ているんだから。あ



なた方も、このキリストから来ているものを同じく受けているから、あなた方一人びとりのそれぞれの持ち味でどんどん伸ばしてください。一向差し支えないから。それが大調和なんだ。私は太鼓を叩いているのに、みんなが太鼓になったら困るんだ。笛を吹く人もあつていい。バイオリンもあつていいし、ピアノもあつていいし、歌をうたう人もあつてもいい。むしろ、あつた方がいいんです。そういうようにしてそれが大交響楽になる。ただ、それがみんな本ものであること、みんな天来の響きであるということだけが大事なんです。およそ制限しているような世界ではない。

●聞かれざる祈り

「人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益かあらん」

と。そのように神さまは、キリストは、私たち一人びとりを絶対的なものに仕上げ、そのような存在として一人びとりの生命を哀惜している。行き詰まったときに、キリストの前に本当に自分を投げ出してごらんください。それは声が聞こえてくるから。

「よしっ、心配はいらん。心安かれ」

と。今いろいろなことで行き詰まっている状態にある人を、私は午前話しながら話の呼吸の中で祈っている。

「神さま、助けてやってください」

と。その主に帰せるところの執り成しの悲願をいつか感ずる時がくると思います。

祈りは必ずきかれる。一番深い意味においてきかれる。現象面ではどうであろうとも、一番深いところできかれる。一番深い角度では必ずきかれる。キリストに即した祈りは必ずきかれますから。その点では絶対に、

「この祈りはきかれるだろうか、きかれないだろうか」

なんて思わないでください。いわゆる相対的に

「聞かれざる祈り」

が本当は一番深くきかれている祈りになるんです。

「ああ、これは祈りが聞かれた、聞かれた。万歳、万歳！」

なんて、ただ有頂天になったらダメだよ。あるときは、有頂天になったっていいけれども。

「聞かれようが、聞かれなからうが、本当は一番深いところでは私の心以上に聞かれている」

という、この信仰でいかなければダメです。そこが神絶対というところなんです。キリストの御意絶対というのはそこなんです。あきらめではない。それが一番強烈なんです。そうしたらば、一流の仏教の坊さんと決して負けない世界に入れますよ。日蓮を読んだって、親鸞を読んだって、何を讀んだって、スースーと受けとれるようになる。

私の小学校、中学校時代の小池というものを知っている友だちはおそらく、私に会った



らびつくりすると思う。あの弱虫の泣き虫の——唱歌の時間に試験で歌わせられると、足が震えてろくに歌えない——そういう弱虫なんです、私は本来。ところが、どういうことだか知らんけれども、御霊の世界に入ってしまったら、恐いものがなくなってしまった。昔は、内村先生なんていうのはおっかなくてね、無教会時代はちよつと近寄れなかつたよな。今だったら、内村先生だろうが何だろうが大丈夫です。それは御霊の世界です。キリストに平伏している者が、平伏しの魂が本当の一番素晴らしい力を持っている。これは本当です。

「われ弱きときに強し」

という。女性はやつと弱いようだけれども実は強い。いわゆる芯のあるような強さはダメだよ。非常に柔らかくて、

「柔らかいけれどもどっこい」

という強さ。これは何とも説明できませんけれども、そういうのが本当に強いということ。

「柔よく剛を制す」

ということがそのことです。だいたい本当は女性の方が男性より強い。地上では男は威張っているけれども、天界にいくと女性上位です(笑)。それでまあ安心してください。

「人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益かあらん。一人びとりはそんな生命ではないんだ。私は本当にお前たち一人びとりのために天国をつくらう」としているんだから、そのつもりで喜んでいてくれ」

というわけです。

私は藤井先生のところに最初に行ったときに黙示録の最後のところを教わった。そして、先生と最後にさよならしたのは、1930年6月30日、最後の集会です。これが黙示録の最後なんだ。終りより出でて終りに入った。おもしろかつたな、あの藤井先生の頃は。藤井先生の最後の一年間は黙示録です。

それを私は一か月間、毎日毎日、先生のメモだけをたどって——あとはもう自分で創作してしまっただけでも——藤井全集第六巻の百頁ばかりを書いた。あれは藤井先生との合作ですよ。毎日毎晩、あれを一講ずつ書いた。30日間、よく書いたね、私は。あのときはやっぱり、ある意味において御霊の世界に乗っかっていたのではないかと思う。あれは26歳のときだったな。

皆さんは一人びとりがキリストと同じウエイトの生命をいただいているわけです。これは全世界とも代えることができない。別な言葉でいうと、私たちは、聖霊は何ものとも代えるわけにいかない。どんなものを持ってきても、「聖霊と交換しろ」と言ったら、

「いな。サタンよ、退け！」

と言わなくては。この御霊はありがたい。私から御霊を抜いたら、もうも抜けの殻だ、小池なんてのは。……(録音切れ)

